

これは[給食]ではない

中学校給食検討委員会が「弁当販売」を答申

昨年、市教育委員会が「鈴鹿市でも中学校給食を実施」と表明し、そのための検討委員会が作られて具体案を論議することになっていました。ところが、9月9日に出された委員会答申は、その目的に反して「給食」とはまったく違う「弁当販売」という内容になりました。

委員会答申は、給食ではなく「子育て支援」として行ない、名称は「ランチサービス」とする、家庭からの弁当、パン販売、弁当販売のうちから、生徒が自由に選択する、市栄養士が献立作成するが、あとは業者が行なう、価格は400円以内とするが、市の補助はしない、というものです。また、3中学校で試行するため、今年度中に配膳室などを設置して、来年4月からスタートするということです。

いったいコンビニ弁当と、どこがちがうのか？

入口は「給食」なのに、出口は「弁当」、こんなペテンのような最悪の答申がなぜ出たのでしょうか。経過を見ると、教育委員会が最初から給食をする気がなかったことがうかがえます。第1回委員会から「デリバリー方式（弁当）」が議題に上がり、「財政負担を抑える」ことを最前提として議論が意図的に誘導され、父母にきいたアンケートで「小学校のような給食」を望む声がいちばん多かった結果も、まったく無視されています。最初から「弁当販売ありき」で、本来の給食を求める声は切り捨てられたのです。

市教委も、この「ランチサービス」の利用率は6%そこそこと予想していて、中学生全体を対象にしないことを前提に、とにかく4月から試行をと急いでいます。こんな安直なやつつけ仕事が、うまくいくはずがありません。他県の例でも、評判が悪くて止めてしまった所もあります。市教委は、学校教育の中の給食の意味を、原点から考え直すべきです。

図書館の全域サービス計画を作って

9月議会一般質問で私は、市立図書館の充実について提言しました。今の図書館は、このだっ広い鈴鹿市に本館がひとつだけ、あとは白子の江島カルチャーセンターに児童図書室があるのと、移動図書館バスが月1回のペースで各地を回っているだけの、お寒い状態です。

私は日本図書館協会などが「せめてこれぐらいは」と出している「公立図書館の望ましい基準」とくらべても大きな格差がある状態を数字で示し、東西南北に分館を設置することによって、全国平均なみの図書館サービスに引き上げることを求めました。

	望ましい基準	鈴鹿市の現状
施設の延面積	5,437㎡	2,951㎡
蔵書冊数	54万冊	32万冊
開架冊数	33万冊	10万冊
図書購入費	550円/人	170円/人
貸出冊数	年10冊/人	年3.4冊/人
職員数	53人	12人

図書館の「望ましい基準」と現状の比較

そして、そのための全域サービス計画を鈴鹿市の「総合計画」の中に、きちんと位置づけることを提案しました。文化振興部長は、総合計画の重点事項として検討すると答えました。

混雑が予想される、新庁舎の立体駐車場

新庁舎の工事が進んでいますが、私は完成後に来庁者が車を置く「立体駐車場」が、このままの計画でいいのか、と問題提起をしました。

立体駐車場はいま予定の半分の東側が出来ていて、すでに利用されています。ところが、その出入口が南側の1ヵ所だけで、前の道路に車が4～5台並んだだけで、今でも口がふさがれてしまいます。いまあちこちに分散している庁舎がすべて新庁舎に統合されたあとは、駐車場の利用と周辺の通行量は格段にふえると予想されます。その時に出入口が1ヵ所しかない駐車場がネックになることは目に見えています。

私は、西半分が着工されていない今のうちに、駐車場計画を見直し、少なくとも出入口を2ヵ所にする、前の道を一方通行にするなどの手を打つことを求めました。市側は検討をすることを約束しました。

またまた下がった水道使用量

平成15年度の水道事業決算が9月議会に出されました。その特徴は、水道使用世帯は増えているのに、年々使用量が減ってきているということです。1年のいちばんピークの日でも、配水量は日量

	給水戸数	一日最大配水量 m ³	一日平均配水量 m ³
H12年	67,106	94,114	77,886
H13年	68,652	89,901	75,837
H14年	70,047	87,612	75,148
H15年	72,328	82,457	72,708

9万トン大きく下回り、第5期水道拡張計画でいう12万5千トンどころか、古い4期計画の10万8千トンのレベルにも達しません。

節水型生活が定着し、安定した水道事業が可能に

このような傾向は、一面では料金収入が予定したほど入らないという問題を生じますが、一方では、水が不足と騒ぐ必要がなくなり、今ある自己水源を大事に使いながら、送水・給水施設を計画的に更新していく仕事に専念することが出来ます。つまり、新たな施設のための巨額の投資、そのための借金、そのための料金値上げなどが、必要なくなるということです。水道局も、しばらくは料金値上げはしないと断言しています。

これに加えて、もう5年もすれば、バカ高い三重用水の料金が大きく下がる見通しで、さらに「先送り」とされている「長良川導水」からの受水事業が正式に廃止されれば、鈴鹿市の水道事業は、長期安定経営というめでたいこととなります。ただし、政治家や役人がまた悪いことを企まなければ、という前提ですが。

鈴鹿亀山広域連合の継続に、10議員が反対

亀山市と関町の来年1月合併にともなって、介護保険事業を行なう広域連合を新亀山市と継続する議案が、賛成多数で可決となりましたが、共産党ほか10議員が、鈴鹿市単独の方が市民サービスが出来ると、反対しました。

ずいそう

映画「スウィングガールズ」

いま話題の映画「スウィングガールズ」は、東北地方の田舎の女子高校生たち、それも落ちこぼれ気味のメンバーが、ひょんなきっかけからジャズのビッグバンドに挑戦し、最後には見事な演奏を披露するようになるまでの、きびしくも楽しい物語である。

やる気にさえなれば、出来てしまうのだ

この物語の面白いところは、出演メンバーが役柄と同じく、まったく楽器が出来ない所からスタートして、猛練習のすえに聞く人を感動させるようなレベルに到達してしまうという、「人はだれでも成長できる」ことを証明した点である。役者本人が演じる人物とともに成長していく、それを見ている観客も、何か自分も出来そうな気になって、ちょっと希望をもって映画館を出る。今の世の中に無くなりつつある「共感」を、強く感じるのである。

私も中学のブラスバンドでトランペットなどをやっていたことがあり、1ヶ月や2ヶ月であんなに出来るようになるのは、相当の練習をしなくてはムリだと思うが、それが可能になったのは、それが「吹奏楽」ではなくて「ジャズ」だったからだ。吹奏楽は自分の個性を出してはいけないが、ジャズは思いっきり自分を表現する。上手でなくても自分の音を自由に出す、文字どおり「音を楽しむ」、音楽の本来のあり方、原点に戻れば、こんな楽しい「自己実現」はないのである。

もうひとつは、この物語のモデルになった高校が実際にあるということである。兵庫県高砂高校、長野県蓼科高校、東京都ICU高校などのビッグバンドが、楽しくがんばっているそうで、そのこともちょっと驚きである。

何をやっても続かず、あきっぽい性格の主人公が、目の色を変えてジャズに打ち込み、とうとうコンクールに出場するまでの過程は、「このごろの若者」にたいする我々の見方が一面的であり、いつの時代も若者は新しいこと、未知のこと、困難なことへチャレンジするエネルギーを持っている、問題は接近の方法が、時代によって違うだけなのだということを示している。さて、近日上映となる「スクールウォーズ」も、荒れた学校からラグビー日本一となった伏見工業高校をモデルにしたもので、これも楽しみである。